

## ワークショップ 「スポーツにおける間身体性の認知科学」

6月19日(日) 14:30~16:30

オーガナイザー・提題者： 河野 哲也 (立教大学)

提題者： 長滝 祥司 (中京大学) ・西川 太智 (中京大学)、  
日向 悠太 (立教大学)

### ワークショップ趣旨

認知哲学における知覚と概念をめぐるマクダウェルドレイファス論争では、個別的コンテクストに密着した「非概念的な没入的対処」とそこを離れて概念的・合理的に思考する上層階との区別や関係が議論されるなかで、状況への身体的かつ知性的な応答が課題に上がってきた(McDowell 1994, 2007; Dreyfus 2005, 2007; Dreyfus and Taylor 2015)。また、身体性認知科学や関連する哲学においては、スポーツや演劇、ダンスなどにおけるスキルやパフォーマンスに注目が集まり(Fridland and Pavese 2021)、スポーツ心理学との身体性認知科学との共同研究(Cappuccio 2019; Smith and Sparkes 2019)が興隆した。さらに、アートやスポーツの分野と連携した「パフォーマンス哲学」という分野がシリーズで出版を開始している(Chambers 2017; Grant et al. 2019; Johansson 2008; Maoilearca & Lagaay 2020; Welch 2019)。

認知哲学や心の哲学の裾野が、英語圏の一部の狭い関心や民族的文化を超えて広まることによって、「身体という巨大な知性」という新しい重要なテーマが研究され始めたこと、そしてマクダウェルやドレイファスの世代においては必ずしも実現できているとは思えなかった実証科学と哲学との本格的な連携が開始され始めたことは慶賀されるべきである。

芸術やスポーツにおいて身体的に実現されるアート(技芸)、スキルとパフォーマンスは、身体と知性(理性)あるいは「心身」という従来の区別が最初から崩落している分野である。スポーツやアートは、身体化された知性、あるいは知性化された身体性を探究する活動だからである。スポーツ学や運動学が探求するさまざまな現象は認知哲学にとっても重要なテーマであるとともに、それをどのように研究するかという方法論的問題は、スポーツ学や運動学全体の基礎として無視できない問いのほずである。とりわけ、一回性が強いパフォーマンスという現象を捉えるには、再現可能性を研究の基礎に据える従来のハードサイエンスは最初から失格しており、これまでの心の哲学で多少触れられてきた習慣性やスキル獲得についての身体論的枠組みだけでも十分とは言えない。この分野では、現象学的記述、質的記述、生態心理学などの心理学的方法を利用しながら、さらに新しい科学方法論が求められている。

本グループは、科研費「顔身体学」(17H06346)の資金を得て、スポーツの認知哲学あるいは実験哲学を共同で探究してきたが、とりわけ注目してきたのは、スポーツにおける間身体性である。多くのスポーツの競技や練習の場面において身体同士のやりとりが生じるが、これについては、練習の場面であっても一回性の強い現象であり、数量的・定量的に捉えることが困難な身体運動であることが指摘されてきた。本グループは、ビデオ撮影したものを当事者の観点から分析していく研究を展開してきた。それを通して、芸術やスポーツなどのパフォーマンスにおいて、「相互につながりながら場に参加する(=Joinする)」身体同士の相互作用のあり方を現象学的・質的・当事者的な視点から解明する必要があることが理解された。スポーツや芸術におけるパフォーマンスでは、パフォーマンス(複数)―場―観客(視聴者)の三項関係が構築されながら、それぞれの立場において間身体的な交流が経験される。ここで生じている経験を個々の場面においてデジタルに記述分析し、デジタルデバイスを用いた共同参照をパフォーマンスの過程そのものに組み込むような、実践―観察、パフォーマンス―鑑賞、行動―認識という二分法を超えた枠組みを提示できる新しい「デジタル現象学」が求められる。

そこで本ワークショップでは、間身体的なスキル、アート、パフォーマンスをどのように捉えればよいかというスポーツ学・運動学の基礎論・認識論に関わる議論を提起する。河野は、スポーツにおけるデジタル機器を使った記録と分析を基にした質的・現象学的記述の方法、すなわち、デジタル現象学の可能性を追求する。長滝はスポーツのインストラクションにおける意図共有の現象に注目し、それを哲学的・認知科学的に解明することをめざす。日向は、教育学的な視点から、スポーツや体育における教育者と学習者の関係に目をつけ、人間・文化の複数性という観点から従来の体育教育の目的を批判的に検討する。これらの発表を通じて、今後、スポーツの認知哲学、スポーツのデジタル現象学の可能性を開いていくことを意図している。